

生誕一二二年 小栗虫太郎展

小栗虫太郎は明治三四（一九〇二）年、東京神田の酒問屋の家に生まれました。本名・栄次郎。昭和八年、「完全犯罪」で探偵小説家としてデビュー。

昭和九年、大作「黒死館殺人事件」を『新青年』に連載。江戸川乱歩をして「世界の探偵文学史上に、あらゆる流派を超越した一つの地位を要求できるであろう」とまで絶賛されました。現在でも夢野久作「ドグラ・マグラ」、中井英夫「虚無への供物」とともに三大奇書として畏怖される存在です。

他にも「白蟻」「オフエリヤ殺し」「紅殻駱駝の秘密」「魔童子」「二十世紀鉄仮面」など、多彩な作品で独自の文学世界を築いてきました。

昨年、小栗が戦時中に連載していた新聞小説「亜細亜の旗」が発見され、これまでとは違った相貌も確認されました。

小栗虫太郎生誕一二二年目、虫太郎親族、成蹊大学、研究者の協力により、複製資料や作品掲載雑誌類、初版本、「新青年」その他などで、日本探偵小説史上にひととき異彩を放つ作家・小栗虫太郎の世界を紹介いたします。



小栗虫太郎と子どもたち。
左から三男・宣治、長男・一弥、虫太郎、長女・栄子（昭和十一年）。現在は成蹊大学図書館所蔵。



中井英夫編纂
『黒死館殺人事件』
（新潮社 1935年）



『魔童子』
（黒白書房 1936年）



『地中海』
（ラチオ科学社 1938年）



『探偵時代小説集』
（今日の問題社 1942年）

【ギャラリートーク】

12月14日午後4時より沢田安史、本多正一、竹上品によるギャラリートーク「小栗虫太郎、中井英夫、中城ふみ子」本をめぐるあれこれ」を開催します。
※要入館料

【同時開催】中井英夫・中城ふみ子展

ともに一九二二年生まれの中井英夫と中城ふみ子。

中城ふみ子は池田龜鑑に中世文学を学び、結婚・出産・離婚や多くの恋を経験し、岡本かの子に憧れ、自身の感性を貫き短歌を詠みました。「短歌研究」一九五三年一月号で募集された第一回五十首詠で特選に選ばれたことにより大きな注目を集めます。

そこには、「短歌研究」の編集者・中井英夫の存在がありました。応募作の中から中城の歌に目を止めた中井は、病床の中城と手紙を交わし歌集出版に向けて突き進みます。中城の第一歌集「乳房喪失」は一九五四年七月に作品社より刊行されました。

中井は編集者として活躍した後、執筆に専念。一九六四年に塔晶夫の筆名で小説「虚無への供物」を刊行します。その後も華麗な文体で幻想的な詩・小説・随筆を発表しました。

生誕百年の節目に、歌人の中城ふみ子と編集者・作家・詩人の中井英夫を取り上げ、キーワードから二人の作品世界を辿る展覧会を開催します。